私の趣味

54 期　荒井 丈満

後楽園キャンパスのテニスコート横でエルゴマシーンを引いていると、丸ノ内線の向こうに広がる東京ドームシティの喧騒が、手に取るように聞こえてくる。野球の歓声、ライブの重低音、ジェットコースターの轟音。東京ドームから徒歩 5 分ほどの立地は、野球好きの友人には大層羨ましがられたものだ。

丸の内線の後楽園駅とは東京ドームを挟んで反対側の水道橋駅側に後楽園ホールはある。東京ドームのお客さんはほとんど通り過ぎてしまうような場所だが、知る人ぞ知る「格闘技の聖地」としてプロレスやボクシング、キックボクシングといった格闘技の興行で用いられている。平日はほぼ毎晩、土休日に至っては昼夜でプロレスや格闘技の興行が入ることも珍しくない。

後楽園ホールを東側バルコニーから望む。
笑点の公開収録の会場といえばピンとくる方も多いだろうか。写真左手のオレンジ色の座席は、番組の前半の「演芸」のコーナーで、司会の昇太師匠が座り出演者を紹介している、あの座席である。

私はひょんなことがキッカケでプロレス趣味に出会い、大学から近いことをいいことに後楽園ホールに足繁く通う学生生活を送ることになる。

この原稿では私のプロレス趣味のあらましと、惜しくも世間であまり知られていないプロレスの魅力について書き記したい。

2016 年夏、私は大学二年生の夏休みを謳歌していた。初めて単位を落とした前期期末試験が終わり、週に 3,4 日戸田に行き乗艇、合間でアルバイト、なんとか日程をやりくりして旅行と忙しない日々を送っていた。夏を通して、日中家にいる時間はほとんどなかったように記憶している。
そんなある夜、ひと段落した私は何の気なしに Youtube を見ていて、その動画に出会う。

“The best of Hayabusa“

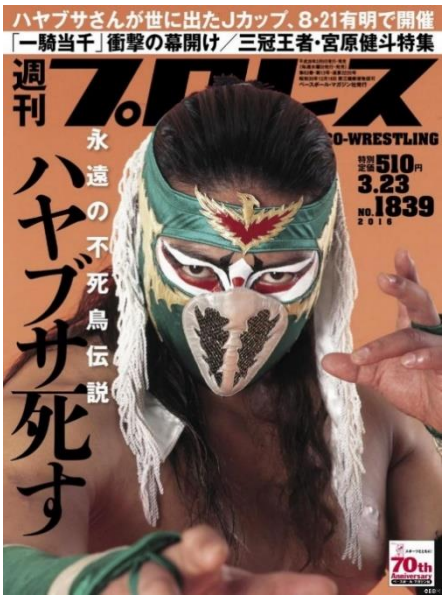
おそらく、プロレスの動画だった。
動画によると「ハヤブサ」というプロレスラーだそうだ。
プロレスといえば、ガタイのいい男たちが黒パンツ一丁で体をぶつけあう、血を流しあう、罵倒しあう、勝手にそんな世界だと思っていた。
この動画に映る世界は違っていた。
四角いリングを、カラフルなコスチュームを着、一見不気味なマスクをつけた人が飛び回っている。
プロレスのリングは通常、床から 1m ほどの高さに組まれる 6m 四方のマットと、四隅に立つコーナーポストを 3 本のロープで張り固定している。
ハヤブサはロープに飛び乗って宙返りしながらリング上の相手に体を浴びせたり、ロープとロープの間を擦り抜けて場外へダイブしたり、次々と空中技を繰り出す。トペ・コン・ヒーロ、ラ・ケブラーダ、シューティングスタープレス、ファイアーバード・スプラッシュ。とにかく飛んでいるのだ。そして技が決まる度に聞こえる場内の歓声、熱狂する解説席。
私がこれまで持っていたプロレスのイメージとはかけ離れていた世界が、その動画の中には広がっていた。

人間がここまで常人離れしたパフォーマンスをし、人間をここまで湧かす空間があるのか。

動画にすっかり魅了された私は関連動画を見進め、ハヤブサというプロレスラー、ひいてはプロレスという世界についていくつか情報を得る。

プロレスラーには素顔で試合をする選手もいるが、中にはマスクやペイントを施し独自のキャラクターを確立している選手がいること。
日本で活躍するプロレスラーにはメキシコで修業を積む選手が多くおり、ハヤブサ選手もその一人であること。
その独特なムーブで当時の国内マット界に大きな影響を与え、現在もハヤブサ選手のプロレスに影響を受けた選手は業界に数多くいること。
そして、試合中のアクシデントにより頸椎を損傷し、永く車いす生活を送っていること、いや、送っていたこと、が正しい。
その年の 3 月にくも膜下出血で亡くなっていたこと。

ハヤブサ選手が亡くなった翌日に、ハヤブサの代名詞ともいえるファイアーバード・スプラッシュを試合で繰り出した一人のプロレスラーがいた。



ハヤブサ選手の訃報を報じる週刊プロレスの表紙。（週プロ mobile より引用）

ドラゴン・キッド選手。
ハヤブサ選手が所属していた FMV という団体でレフェリー（プロレスにおける審判）として働いていたが、プロレスラーになるべくメキシコにわたり修行を積んだのち、闘龍門という団体でマスクマンとしてデビューした。ハヤブサ選手を師匠として慕い彼自身も数々の空中技を持つが、その日繰り出したファイアーバード・スプラッシュは 17 年ぶりの披露だったそうで、まさに亡くなった師匠への手向けと取ることができる。

なんて粋な世界なんだろうか。

ハヤブサ選手が亡くなった二日後のドラゴンゲート大阪大会にて、ハヤブサ選手の遺影を掲げ笑顔を見せるキッド選手。
この出来事が、私がドラゴンゲートを見始めるきっかけとなった。（週プロ mobile より引用）

ハヤブサ選手やキッド選手の空中技はもちろん、プロレス自体に興味を持った私は Youtube だけでなく一度会場に行ってこの目で見ておきたかった。
残念ながら半年前に亡くなったハヤブサ選手の試合を生で見ることは叶わなかったが、ドラゴン・キッド選手はドラゴンゲートという団体でまだ現役を続けている。
調べてみると全国各地で試合しているらしく、都内でも月に一回試合があるらしい。会場は後楽園ホール。ん？後楽園？調べてみると、やっぱりだ。我らが後楽園キャンパスから歩いて 10 分くらいだ。平日開催なら、大学終わりに向かうことができる。
大学から目と鼻の先の立地を運命的に感じながら、授業もなくボートの用事もなくバイトもないタイミングを今か今かと待ち構えた。

【左】ドラゴン・キッド選手は身長 162cm と小柄。（2021 年 3 月大阪）
【下】ロープにもたれる相手に対し、ロープを掴んだ手を軸に回転し蹴りを浴びせる技「６１９」を繰り出すキッド選手。６１９は、開発した選手の出身地カリフォルニア州・サンディエゴの市外局番である。右手に写るのはキッド選手の弟子としてデビューした若手のドラゴン・ダイヤ選手。（2023 年 3 月後楽園ホール）

2016 年 11 月 10 日は木曜日だった。授業が昼過ぎに終わった私は、夕方には学内の用事を終わらせて意気揚々と水道橋界隈に向かった。

初めてのプロレス観戦は驚きと興奮の連続だった。ここで観戦記を事細かに書いてしまうと読者を置いて行ってしまう恐れがあるので、初めて見たプロレスの感想は箇条書きにとどめたい。

試合前にリング上でダンスパフォーマンスをするチームも。(2019 年 10 月後楽園ホール)

・会場の雰囲気はイメージと全く異なる。

プロレスの会場というと、「汗臭い」「おっさんが多い」「酒やたばこのゴミが散乱している」といったイメージが私にはあった。ところが会場に入ると、大会開始前からカラフルな照明が場内を覆いつくしアップテンポな曲がかかるオシャレな空間が広がっていた。客席を見渡すと会社帰りっぽいおっさんやコアな男性ファンがいるが、驚いたことに女性ファンも半数ほどいる。プロレス四天王や闘魂三銃士の頃はいなかったであろう、「プ女子」なるものが世の中一定数いるのである。

・闘うだけかと思いきや皆さんよくしゃべる。

ドラゴンゲートの大会では毎回、試合開始前に選手がリングに上がり、その日組まれた試合の見どころや最近のリング上での出来事を紹介する時間が設けられている。また、会場にいる子供をリングに上げ、その子の名前や年齢、好きな選手を聞いて、試合開始のゴングを叩かせてあげるサービスを行っている。

選手同士が敵対しあっていたり近々ビッグマッチで大事な試合が組まれていたりする場合、試合後にもマイクを使って自己主張する時間、マイクパフォーマンスで次の試合や闘いのストーリーが決まることも頻繁である。

試合だけでなく試合前後に口でアピールを行うことで、初めて来たお客さんでもストーリーについてこれるし、次回の大会や直近のビッグマッチへの客足にもつながるのだ。

【左】「ゴングキッズ」のコーナーはコロナ禍期間中には中止していたが、最近は地方大会を中心に復活してきた。(2017 年 5 月愛知)
【右】試合後にベルトへの挑戦アピールを行う ISHIN 選手(左側)は業界でも珍しい、両親ともに元プロレスラーという生い立ち。(2022 年 12 月後楽園ホール)

・試合中の技や入場時のパフォーマンスが華やか。

先述のハヤブサ選手やドラゴン・キッド選手もさることながら、実際に試合を見るとそのアクロバティックな動きに目を奪われる。リングに対する受け身の音も想像以上に大きい。

また、試合前の入場も見ものである。ダンスをするチーム、キックボードで入場するチーム、スケートボードで入場する選手、、

プロレス会場に行けば、街では見られない非日常と出会うことができる。

【左】入場時にダンスパフォーマンスをする選手たち。(2018 年 10 月後楽園ホール)
【右】スカジャンを着てキックボードで入場する選手たち。望月ジュニア選手(中央)は望月マサアキ選手(右側)の実の息子で、ジュニア選手のデビュー戦でサプライズとして発表された。それまでマサアキ選手は結婚していることすら公表していなかった。(2022 年 8 月神戸)

【左】リング外にいる対戦相手に向けて、ダイブするトペ・コン・ヒーロの共演シーン。軽量級の選手たちはそれぞれ独自の飛び技を持ち、観客を沸かす。(2022 年 11 月後楽園ホール)
【右】2023 年デビューの田中良弥選手(右側)が、1997 年デビューのドン・フジイ選手にドロップキックを放つ。フジイ選手がデビューした年には田中選手は生まれておらず、私も生後二か月。幅広い世代の選手が活躍する。(2023 年 6 月後楽園ホール)

最後に、ドラゴンゲートをはじめ、各プロレス団体は日本各地をくまなく巡業している。文章で魅力を伝えるのは難しいところだが、少しでも気になった方はぜひ会場に足を運んでほしい。

あなたの街のすぐ近くにも、プロレスは来ているかもしれない。